

人口にみる終戦前後の福生

成田 和子

終戦前後の福生の人口統計の一部を書いたものが手元に残っている。

昭和二十二年八月から十二月末にかけて、福生町役場と西多摩地方事務所に於て、レポート作成の資料として写させて頂いたものである。

また、昭和二十三年八月一日現在の人口の写しと、二十四年十月に福生町役場が発行した人口並びに世帯数統計の印刷物一枚も残っている。

これ等を見ると、少い資料の為に、不明の部分やくい違いなど疑問点は有るが、終戦前後の福生の人口の概略を知ることができる。

「飛行場ができる」

明治三十八年当時、福生は人口が三千五百人足らずの農村であり、昭和の始め頃までは、自然増の型でわずかに増える程度であった。

しかし、昭和十四年、村の東北部に陸軍の飛行場が造られ、軍都としての姿をおびてくるのにもない、人口の形態も次第に変っている。

飛行場には、陸軍航空審査部（飛行実験部）陸軍航空整備学校、陸軍気象部が置かれ、町には軍人や飛行場勤務の人の下宿、家族による間借り、借家が増え、軍人専用の寮も見られるようになった。

また、十年代以降、昭和飛行関係の人の居住も目につ

福生町(村)人口

明治	38年	3,488人
	43年	3,675
大正	4年	3,766
	11年	5,027
昭和	2年	6,092
	7年	6,394
	12年	6,624
	17年	8,555
	22年	19,986

(昭和22年8月福生町役場にて記録)

西多摩郡町村別人口表

町村名	昭和19年12月	昭和20年12月	昭和21年12月	昭和22年12月
福生町	10,644	10,165	21,766	20,159
西多摩村	6,842	8,312	8,285	8,312
瑞穂町	7,721	8,426	8,568	8,734
多西村	4,111	5,310	4,977	4,973
平井村	2,943	3,518	3,339	3,309
東秋留村	4,777	5,467	5,162	5,282
西秋留村	3,226	3,727	3,617	3,583
増戸村	3,455	3,860	3,701	3,691
大久野村	4,927	5,722	5,311	5,289
戸倉村	1,622	1,912	1,774	1,794
小宮村	1,963	2,395	2,188	2,221
五日市町	5,945	7,513	7,236	7,413
檜原村	5,708	7,178	6,695	7,064
霞村	8,778	9,601	9,505	10,159
小曾木村	3,334	3,898	3,770	3,697
成木村	3,186	3,838	3,676	3,722
青梅町	12,706	14,663	15,179	15,364
調布村	8,199	9,775	9,547	9,677
吉野村	4,019	4,942	4,667	4,685
三田村	4,573	5,870	5,679	5,684
古里村	4,062	5,273	4,988	4,988
水川町	7,413	8,061	7,111	7,827
小河内村	2,051	2,836	2,672	2,915
計	122,205	142,267	149,423	150,542

西多摩郡町村別人口増減表

町村名	昭和19年12月 ～20年12月	昭和20年12月 ～21年12月	昭和21年12月 ～22年12月
福生町	-479	11,611	-1,617
西多摩村	1,470	-27	27
瑞穂町	705	142	166
多西村	1,199	-333	-4
平井村	575	-179	-30
東秋留村	690	-305	120
西秋留村	501	-110	-34
増戸村	405	-159	-10
大久野村	800	-416	-22
戸倉村	290	-138	20
小宮村	432	-207	33
五日市町	1,568	-277	177
檜原村	1,470	-483	369
霞村	823	-96	654
小曾木村	564	-128	-73
成木村	652	-162	46
青梅町	1,957	516	185
調布村	1,576	-228	130
吉野村	923	-275	18
三田村	1,297	-191	5
古里村	1,211	-285	0
水川町	648	-950	716
小河内村	785	-164	243
計	20,062	7,156	1,119

(昭和22年西多摩地方事務所にて記録)

くようになった。

重役住宅と呼ばれたものが数個所に造られた外、役場近くには大きな寮が建てられ、更には、農家の蚕室や二階を借りて社員住宅にする等、そちこちに昭和飛行の存在が感じられた。

K家の例でみると、昭和十七年から十八年頃には母屋の二部屋を軍人家族に貸しており、十九年頃になると、蚕室だった建物を昭和飛行の会社へ貸して、幹部社員二世帯が終戦後まで住んでいた。

「頼まれて貸すことになった」

との、主の言葉を聞いている。
更に、二十年春頃より終戦の数日後までの間は、気象部からの依頼によって、軍需物資(毛布、缶詰、紙類等)を土蔵や母屋の一部に預かるといふことも受け入れている。

昭和十七年、福生の人口は八千五百人を越えた。

「西多摩郡全体の人口」

終戦前後、即ち昭和十九年十二月から二十二年十二月にかけての西多摩郡全体の町村別人口は、当時の地方事務所での資料によると上のよ

うになっている。

昭和十九年十二月から、終戦の日の二十年八月十五日までは、西多摩郡全体としては、出征や徴用による人びとの転出、疎開者による転入のあった時である。

また、終戦の日から十二月末までの四か月余りの間は、国内にいた軍人軍属や、徴用の人たちが、解散になって家に戻った時期である。

しかし、都市部から郡内に疎開していた人達の中には、住宅や食糧事情などの関係で、元の居住地に戻れないでいた人も多い時代である。

二十一、二年になると、外地からの復員者や引揚げの人たちによる転入、疎開していた人たちの引揚げによる転出も増えてきた時代である。

しかし、こうした時点で、福生の町は郡内の他の町村とは逆の傾向を示している。福生町のみ、二十年十二月の人口が、前年の十九年十二月より減少しているのである。

この点について、二十三年に書いたレポートの中で、「福生町に於ては疎開者は少なかった（疎開者の転入が禁じられていた）が、終戦により、日本陸軍の飛行場及び工場の軍人や従業員が解散になった為、二十年末で減少した」

と書いてあり、この把握に誤りが無ければ、戦時中の

福生は軍都としての性格もあって、特別の事情によるもの以外、一般の疎開者は受け入れていなかったのではないかと考えられるし、それ故に、軍人や徴用の人達等の解散結果が大きく影響したのではなかったかと推測されるのである。

「飛行場が横田基地に」

敗戦により接收された福生飛行場は、二十年九月には米軍が進駐してきて「横田基地」となった。

やがて、滑走路の拡張工事の為に多摩川の砂利が使われ、川底が下ったと言われる程に運ばれていった。

「あんなに掘っては、川が危ない」

との人びとの不安どおり、二十三年九月のアイオン台風の際には、川幅いっぱいには拡がった濁流によって秋川側の橋脚が流され、橋の一部が落ちて、多摩橋は渡れなくなった。

基地に必要な砂利は、多摩川だけでは足りないとのことで、更に牛浜のハケ（斜面）の部分が削られることになり、雑木林の続くハケとその上の畑とが対象となった。

当時、ハケには戦争中に飛行機を退避させる為に掘った穴が道路に面して残されており、穴の回りに見えていた砂利に目を付けられたのだといわれた。

耕作していた何軒もの農家の畑が含まれることになっ

た。

この辺りは、「はけ上」とか「富士塚」と呼ばれていた所である。

先祖の代から耕してきた畑であり、時には矢じりなどの見付かることもあった畑である。

畑は、米軍のブルドーザーやダンプカーの音の中で削られ、消えていった。

「すごい機械の力だ」

と、見てきて話す人もいた。

だが、その場所に行くことを避けながら、ころろの中で、じっと音を聞き続けていた人もいた。

土地の補償については、地主にはなされたそうである。小作の人については、補償されたのか否か或は個々の地主の配慮にゆだねられていたのか等はつきりはわからない。

また、補償の金額についても、当事者達が亡くなってしまっている現在では掴めない状態である。

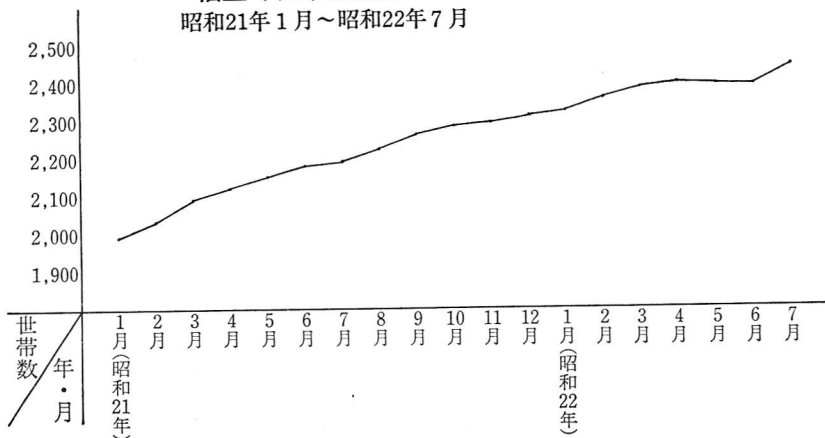
しかし、いずれにしても敗戦後間もない時期である。たとえ、当時の価格で多少の補償がなされたとしても、畑を失うことは打撃である。

土に生きる者や家族にとっては、衝撃だったのである。「殆んど残らない」

と、つぶやいた人の言葉は、そのうしろ姿と共に今も

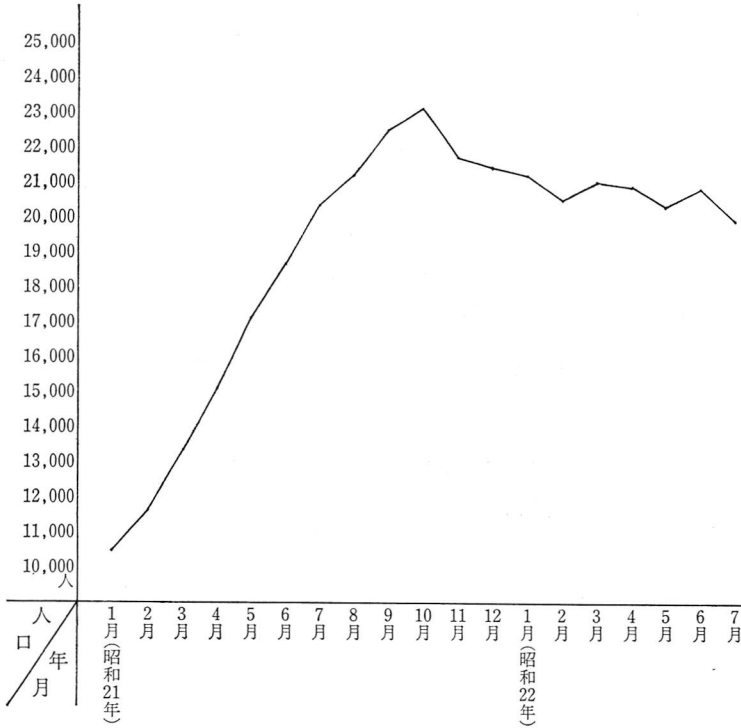
福生町世帯数動態

昭和21年1月～昭和22年7月



福生町人口動態

昭和21年1月～昭和22年7月



心に残っている。
削られた跡の広い土地は、後に整地され、二十三年には中学校が建てられ、翌二十四年には町営グラウンドも竣

工して姿を変えた。
その後、プール用地として更に一部が拡げられるなど、次第に整えられていった。

現在、第三小学校と市営球場として活用されている。

「ふくれ上った人口」

米軍の横田基地拡張工事にともない、町の中には、建設関係の浅沼、大成、間組など、いくつもの組の宿舎が建てられ、作業員その他が激増して、人口は急膨張した。

昭和二十二年二月一日の人口調査結果によると、次のようになっている。

福生町人口 一九、五三八

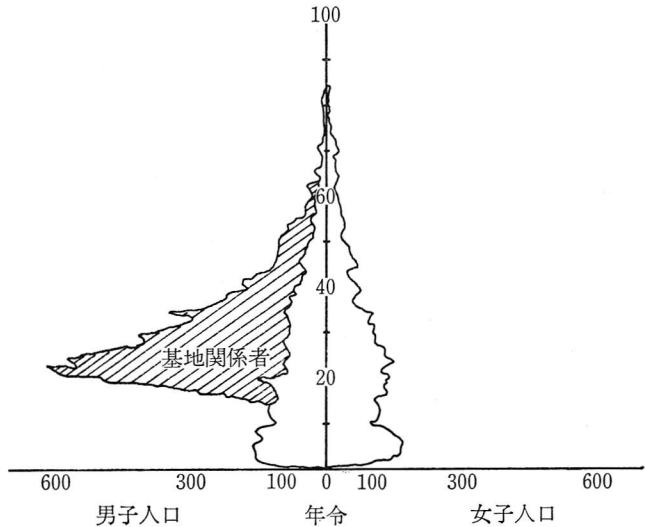
男子 一三、七七四

女子 五、七六四

この時の福生町全体の人口構成を図に現わすと、次の通りである。

男子、二十二歳の場合をみると、全体の人数六二五人中、基地関係の人が五三〇人であり、町の一般男子九五人の五倍以上の数となっている。

人口構成図 (昭和22年2月1日現在)



また、この時点での基地関係の人の数は、全体ではおよそ八千四百人余りであり、町の総人口の中でも大きな割合をしめている。

このように急激にふくれ上った福生の人口は、二十一年十月の二万三千余人をピークにしてその後は減り、多

福生町人口

昭和21年	1月	10,457人
	3月	13,370
	5月	17,122
	7月	20,375
	9月	22,554
	11月	21,776
22年	1月	21,272
	3月	21,009
	5月	20,343
	7月	19,986

(福生町役場にて昭和22年8月記録)

少の増減をくり返しながら二十二年七月には一万九千人台となっている。

しかし、二十三年八月一日現在の人口は、再び二万人を越えているのである。

「流動的人口」

終戦後の福生は、基地工事の組の人達のほか、職場を求めて集ってきた多くの人びと、更には米軍人相手の女性など、流動的な人口が多く、正確な数は把握しにくい状態であったと思われる。

人口の混乱状態とも思える状況がしばらく続いていたことは、二十四年十月に役場より発行されている印刷物の内容の複雑さからも窺えることである。

次の表によると、配給名簿に記された二十四年九月三

福生町人口並世帯数 昭和十四年九月三十日現在 配給世帯在籍代帳より 福生町役場

熊川分	
区分	世帯数
浦	71
町	92
出	92
武藏野	102
434	102
鍋ヶ池	140
745	140
"	157
825	157
半法一	110
627	110
計	672
3562	672
外倉	13
13	13
計	13
13	13
井上	2
12	2
大成	14
67	14
銀場	15
245	15
計	31
324	31
合計	716
3899	716

福生分	
区分	世帯数
半法二	168
751	168
原ヶ池	86
353	86
志茂一	101
527	101
"	232
998	232
永田	147
805	147
長沢一	75
379	75
"	112
531	112
加美一	91
439	91
"	123
608	123
本町一	135
500	135
"	121
543	121
"	87
376	87
"	97
488	97
"	94
439	94
"	104
483	104
"	113
472	113

福生分	
区分	世帯数
本町入	88
400	88
其池	15
17	15
計	1989
9159	1989
外倉一般	147
147	147
若池	14
14	14
計	161
161	161
同業組合	1
290	1
一宮林	78
78	78
長岡家敷	91
349	91
津沼	49
310	49
球木	6
41	6
銀場	56
2030	56
其池	1
27	1
計	204
3125	204
合計	2354
12445	2354

福生町計	
区分	世帯数
福生合計	2,354
12,445	2,354
熊川合計	716
3,899	716
総計	3,070
16,344	3,070

世帯別計

区分	人口	世帯数
福生一般	9,159	1,989
熊川一般	3,562	672
外倉	174	174
組数	3,449	235
総計	16,344	3,070

註 本部落の区別原の通り
昭和十四年十月二十五日現在

福生町の人口 (昭和23年)

年齢	2 歳		3～5歳	6～7歳	8～10歳	11～14歳	15歳	11～20歳	21歳	22～25歳	26～60歳	61歳以上		
	誕生日に達しない者	誕生日に達した者												
計	20,345	311	209	261	899	657	871	989	220	1,831	684	3,065	9,620	728
男	13,849	156	104	139	455	331	450	521	107	1,135	525	2,472	7,127	327
女	6,496	155	105	122	444	326	421	468	113	696	159	593	2,493	401

昭和23年8月1日現在

十日現在の人口及びその内訳は、次のようになっている。

福生町人口

一六、三四四

一般の人

一二、七二一

外食者及び組関係者

三、六二三

これは、半年間で二倍以上にもふくれ上がった二十一年
 当時に比べれば落着いた数である。

しかし、なおも整備の続けられる基地の関係者や、職
 場を求めて集まる様々な職種の人たち、風紀上の問題と
 なり、後に赤線地区を生み出した人たち、更には、一般
 の人の転入による増加等、人びとの動きは激しく、定着
 性の少ない人達の存在を反映するかのよう、児童の転
 入、転出も多かった時代である。

以上は、人口を中心にした終戦前後十年間程の福生の

町の様子である。

人びとのすがた……。

秘められたかなしみ。

忘れることのできない時代である。

(なりた・かずこ 元福生第一小学校教員 福生在住)